

雪国とは？

十日町を訪れる人は、地域の文化や生活を語る際に「雪国」という言葉をよく耳にする。この言葉は「雪の国」と訳され、豪雪地帯を指すが、もっと複雑で詩的なニュアンスがある。

雪国は、日本最北の北海道から東北地方まで分布している。日本海側では島根県まで広がっている。十日町市は、温暖な地中海と同じ緯度にあるにもかかわらず、最も雪の多い「雪国」のひとつである。十日町の豪雪は、日本海と太平洋の中央を走る三国山脈に挟まれた立地によるものだ。冬になると、シベリアから吹き降ろす冷たい風が日本海を渡り、対馬海流に乗って北上する暖かく湿った空気とぶつかる。空気は日本に向かって進むにつれて冷却された水蒸気で満たされ、やがて新潟の内陸山地にぶつかると積乱雲が形成される。そして上昇気流に容赦なく押されながら、積乱雲はその中に含まれる重い水分を雪として落とす。

文字通りの意味だけでなく、雪国という言葉には多くの詩的な意味合いもある。古くから短歌から現代の J-POP まで、さまざまな芸術作品に登場するが、川端康成（1899-1972）の古典小説『雪国』ほど有名な例はないだろう。この小説は、東京のサラリーマンと芸者との、名も知らぬ雪国の温泉での悲運の恋を描いている。この小説は、川端康成がノーベル賞を受賞した理由のひとつに挙げられている。冒頭はこうだ：

「汽車は長いトンネルを抜けて雪国に入った。夜空の下には白い大地が広がっていた。」

文学や大衆文化における「雪国」という言葉の使い方を通じて、雪国は人々の意識の中で北日本のイメージを形成するようになった。雪国と一言で言っても、雪が降り積もった広大な土地、樹木が立ち枯れた寂しい風景、白く凍った岩山などが連想される。この言葉には、豪雪が作り出す独特で禁断的な自然界に対する畏敬の念と、そのような環境の中で生活を切り開くことを選んだ人々の忍耐と不屈の精神に対する尊敬の念が込められていることが多い。

十日町には、この「雪国」の詩的な精神が、何千年もの間、変わらず存在している。